様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４１０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６４６３２４２

研究課題名（和文）看護教員の看護技術演示力と指導言語の連関

研究課題名（英文）Relationship between Ability of Nursing Teachers in Demonstrating Nursing Skills and Their Language Used in the Demonstration

研究代表者
大津　廣子（OTSU, HIROKO）

鈴鹿医療科学大学・看護学部・教授

研究者番号：７０２６９６３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：【目的】看護技術演習で教員が実施する演示に対する学生の認識と、演示時に教員が使用している言語の特徴を明らかにし、効果的な指導言語を使用した演示方法への示唆を得る。【方法】質問紙調査および質的記述的研究と準実験研究。【結果】学生は教員の演示を肯定的にとらえており、教員は、技術の要素を指す言葉、安全安楽、患者への配慮の言葉を多用している。演示時の指導言語にオノマトペを用いた方が、有意に寝衣交換技術の修得度は高かった。【考察】看護技術演習の演示時にオノマトペや比喩的表現を用いた指導言語を活用する指導方法が学生の技術修得には効果的であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：PURPOSE: To obtain suggestions about demonstrative methods in which instructive language is effectively used, by elucidating how students perceive the demonstration performed by teachers in nursing skill practices and by clarifying the characteristics of language used by teachers during the demonstration. METHOD: Survey by questionnaires, qualitative descriptive studies and quasi-experimental studies. RESULT: The students' perception about the demonstration by teachers was affirmative. The teachers used words related to technical elements, safety, comfort, and consideration to patients, in many occasions. In case of learning a replacement skill of sleepwear, the use of onomatopoeia in the demonstration by teachers significantly increased the level of acquisition of skill by student. DISCUSSION: This study shows that the active use of onomatopoeia and metaphorical expressions was effective in letting students acquire skills during nursing skill practices.

研究分野：基礎看護学

キーワード：看護技術　演示　指導言語　オノマトペ　寝衣交換

１．研究開始当初の背景

看護専門職には、専門化された看護技術の保有が必須の要件であり、看護基礎教育においては看護技術の動きを習得するための効果的な指導方法の工夫が求められている。また、2009 年 4 月から実施された看護師教育のカリキュラムでは、新たに統合分野が設けられるなど看護技術教育において知識と技術を統合した看護実践能力の修得にむけた指導の検討が課題となっている。

一般的に看護基礎教育における看護技術の指導方法は、学内演習という授業形態（以下、看護技術演習と呼ぶ。）により展開されている。看護技術演習は、講義で学んだ看護技術の理論を確認し、看護実践に必要な基礎的・基本的な技術を習得するとともに、看護専門職としての態度を学ぶことを目的として位置づけされていることが多い。そして、学生は学内で習得した看護技術を臨地実習の場で看護実践として実際に提供することができるようになるのである。

看護技術教育において、技術の習得は、やってみようという気持ちが生じ、外に現れた行為となって一連の行動を繰り返し行うことができる模倣から始まると言われている。それゆえ、看護技術教育においては学習者が真似をしたいと思わせるような教員のデモンストレーション（以下、演示とよぶ）が有効であると思われる。教員による演示は、学生の学習意欲を刺激し、言葉による説明だけでは理解しにくい技術をイメージ化させ理解を促すことにつながる。演示は、黙って動作を見せるのみでは効果は少なく、その動作を学習者が練習する際にイメージできるような指導言語を伴ってこそ、本来の演示となる。

看護技術演習や指導言語に関する先行研究をみると、看護技術演習における学生の行動に関する報告（宮芝，2012）や、看護技術演習におけるロールプレイからの学びに関する報告（中野，2010）などがみられるが、看護技術を学ぶ学生の意識や認識に関する文献は少ない。さらに、技術教育において教員による演示は有効であるとされているにも関わらず、教員による演示を取り入れている看護技術演習に対する学生の意識や認識に関する報告は見られない。また、看護技術演習時に使用される「指導言語」に関する研究は、スポーツ・体育教育や、能・ダンスなどの芸術分野での研究（北村，2003、永山，2005、植田，2002、中西，2013、及川，2003）が多く、看護技術演習の際に使用される「指導言語」に着目した研究や演示の説明にオノマトペを用いた研究は見当たらない。

そこで、演示を用いた看護技術演習に対する学生の認識と、教員が使用している指導言語の特徴を明らかにし、看護技術教育における効果的な演示方法について検討することを目的に本研究に取り組んだ。

２.研究目的

看護技術演習で教員が実施する演示に対する学生の認識と、演示時に教員が使用している言語の特徴を明らかにし、効果的な指導言語を使用した演示方法への示唆を得る。

３．研究方法

(1)東海３県内の研究協力の得られた大学で、生活援助技術の学内演習に教員の演示を取り入れている 3 大学の 1 年次生に研究協力を依頼した。研究協力の意思を表明した 202 名を対象に無記名の自記式質問紙を用いた調査を実施した。調査内容は、研究者により内容妥当性の検討を行った 25 項目の質問であり、回答方法は「とてもそう思う・とてもあてはまる」4 点、「少しそう思う・少しあてはまる」3 点、「あまりそう思わない・あまりあてはまらない」2 点、「全くそう思わない・全くあてはまらない」1 点の 4 件法を用いた。得られたデータを SPSS ver.22 を使用し記述統計と因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。

(2)看護技術演習の演示時に教員自ら演示に対して説明、または演示しながら説明を行う授業を実施している大学教員 10 名を対象に、インタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。録音した面接内容の逐語録を作成・データとし、演示説明の言葉に関する一つの意味内容につき１コードに細分化し、サブカテゴリー、カテゴリー化を行った。分析の全過程においてスーパーバイズを受け、データの解釈についてはメンバーチェッキングを実施し、妥当性の確保に努めた。

(3)寝衣交換技術の授業を履修していない A 看護系大学１年生で、研究参加への同意が得られた 30 名を対象に、実験群(指導言語にオノマトペを使用)、対照群（指導言語にオノマトペを使用しない）に分け、技術チェック表を用い、寝衣交換技術の事前調査を実施した。その後、群ごとに教員が寝衣交換技術の演示を実施し、週１回一人 15 分の技術練習を２週間実施した後で、事後調査を実施した。寝衣交換技術の修得度（1：まったくできていない～4：できている）を得点化しｔ検定にて２群を比較した。

(4)本研究は、愛知県立大学研究倫理審査委員会および、鈴鹿医療科学大学臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

４.研究成果

(1)教員の演示に対する学生の認識

①項目別でみた学生の認識

有効回答数は 202 部（A 大学 92 部、B 大学 63 部、C 大学 47 部）、有効回答率は 100%であった。信頼性係数はクロンバックα.771 であった。質問紙全体の平均点は 3.09、標準偏差は .536 であった。

項目別平均点をみると、「12.学内演習ではデモンストレーションは必要である。」が 3.87 点を示し最高点であった。次いで「1．学内

演習では、グループ内のお互いの信頼が深められる。」が 3.64 点であった。逆に、低い得点項目をみると「22．私は、教員の技術指導や方法に不満を感じる。（逆転項目）」が 1.93 点で最も低く、次いで「18．私は看護技術について教員から何度も同じことを言われると嫌気がさす。（逆転項目）」が 2.24 点であった。

②探索的因子分析の結果

次に、技術演習を受講する学生の思いや考えを明らかにするために探索的因子分析を用い、主因子法バリマックス回転を行い、因子負荷量が .40 未満を示した項目を分析から削除し、再度主因子法バリマックス回転による因子分析を行い、最終的に 16 項目 4 因子が抽出された（表 1）。

第 1 因子は、「17.私は、納得できない看護技術は、納得いくまで練習する。（因子負荷量 .778）」など 6 項目から構成され、因子名を【看護技術を努力し上達したいと思っている。】とした。

第 2 因子は、「5.学内演習では、協調性を高めることができる。（因子負荷量 .780）」の 4 項目から構成され、因子名を【学内演習では、学生同士の関係性を深めることができると思っている。】とした。

第 3 因子は、「10.デモンストレーション時の教員の動作は、よくわかる。（信頼性係数 .862）」の 3 項目で構成され、因子名を【看護技術習得は、デモンストレーションが有効である。】とした。

第 4 因子は、「R(反転項目)18.私は看護技術について教員から何度も同じことを言われると嫌気がさす。（信頼性係数 .666）」の 3 項目から構成され、因子名を【看護技術習得に対する前向きな姿勢をもっている。】とした。

③考察

本研究により、学生は看護技術演習に対して、【看護技術を努力し上達したいと思っている】ことが明らかとなった。項目別の結果では、「24.看護技術が上手くなる素質があると思う。」という項目の得点は低く、学生は上手くなる素質がないと感じているからこそ、努力することにより克服していこうとする思いが伺える。また、教員が実施する演示については、学生は【看護技術習得はデモンストレーションが有効である】と考えていることが明らかとなった。学生は教員の演じるデモンストレーションを見学することにより、立体的に臨場感を感じながら看護ケアの実際を学ぶことができ、初めて学習する技術のスムーズな行動や手技を確認することができる。また、スムーズな演示は「やってみよう」「あんなふうにやりたい」という気持ちにさせ、学生の学習意欲を刺激するという効果があり、印象に残りつつも、真似したいと思わせるような正確で良い技術を教員が演じなければならない。そのためには、教員の演示力を向上することが重要であると考える。

表1. 探索的因子分析（主因子法 バリマックス回転）

	因子負荷量			
	1	2	3	4
第1因子【看護技術を努力し上達したいと思っている】				
17.私は 納得できない看護技術は 納得いくまで練習する。	.778	.150	-.010	-.091
15.私は 新しい看護技術が身につくまで努力する。	.772	.138	.094	-.141
16.私は 難しい看護技術は何度でもやってみようと思う。	.714	.180	.076	-.104
21.私は 技術練習で一つのことがうまくいかない時 それができるまで努力する。	.644	.150	.046	.066
14.私は 学内演習の技術練習は 楽しい。	.409	.317	.166	-.215
24.私は 看護技術が上手くなる素質があると思う。	.403	.073	-.020	.096
第2因子【学内演習では 学生同士の関係性を深めることができると思っている】				
5.学内演習では 協調性を高めることができる。	.226	.780	.090	.070
8.学内演習では グループ内の連帯感が深められる。	.177	.775	.088	-.071
1.学内演習では グループ内のお互いの信頼が深められる。	.126	.698	.063	-.084
6.学内演習では 準備から後片付けまで学生が実施することは大切である。	.397	.504	.187	.007
第3因子【看護技術習得は デモンストレーションが有効である】				
10.デモンストレーション時の教員の動作は よくわかる。	.034	.069	.862	-.102
9.デモンストレーション時の教員の説明は よくわかる。	.083	.137	.774	-.086
11.デモンストレーション後は その技術がイメージできる。	.065	.067	.705	.043
第4因子【看護技術習得に対する前向きな姿勢をもっている】				
R18.私は 看護技術について教員から何度も同じことを言われると嫌気がさす。	.030	-.080	-.105	.666
20.私は いつもの技術練習よりも 技術試験のための練習の方が熱心である。	-.105	.049	.079	.633
R22.私は 教員の技術指導の方法に不満を感じることがある。	.010	-.108	-.431	.505
因子寄与率(%)	17.102	13.774	13.381	7.717
累積寄与率(%)	17.102	30.876	44.257	51.974

(2)教員が演示で用いている指導言語の特徴

①対象者の概要

対象者の年齢は 40 代が 6 名、50 代が 4 名で全員女性であった。教員経験年数は 5 年未満が 1 名、5～10 年が 3 名、11～15 年が 2 名、16～20 年が 4 名であった。演示した看護技術は、寝衣交換が 2 名、洗髪が 1 名、排泄援助が 2 名、おむつ交換と陰部洗浄が 1 名、皮下注射が 1 名、浣腸が 1 名、体位変換が 1 名、ベッドメイキングが 1 名であった。

②教員が用いている言葉

得られたデータ総数は 117 コードであり、13 サブカテゴリーと、6 つのカテゴリーが導き出された。以下にそれぞれのカテゴリーについて説明する。【　　】はカテゴリー、〈　　〉はサブカテゴリー「　　」はコードを示す。

【　要素行動を指す言葉　】は、技術の演示の際に技術の要素行動を示す言葉のまとまりから構成される。

「作業域を考えましょう」など、〈　技術の要素を伝える言葉　〉と、「汚い物汚い手で清潔なところを触らない」などの〈　技術の留意点を伝える言葉　〉、「温度は○度ですよね」などの〈　技術の要素を示す言葉　〉の 3 つのサブカテゴリーからなる。

【　安全安楽と患者さんへの配慮の言葉　】は、技術を演示する際に安全性や安楽性に関する言葉や、患者さんへの配慮に関する言葉のまとまりから構成される。

「それで安全？」・「安楽な方法はこうですね」などの〈　安全安楽と患者さんへの配慮を促す言葉　〉や、「カーテンはきっちり閉めて隙間のないように」などの〈　安全安楽

と患者さんへ配慮する言葉　〉の 2 つのサブカテゴリーからなる。
【　学生の思考を促す言葉　】は、技術の演示の際に学生に何らかの思考を促す言葉のまとまりから構成される。「それってどうですか」など〈　考えさせるための言葉　〉と、「困っていることは何？」などの〈　難しい部分の確認をする言葉　〉、「注意することとして、なぜかっていうことを言う」などの〈　根拠を説明する事葉　〉の３つのサブカテゴリーからなる。
【　見せることを重視した言葉　】は、技術の演示の際に学生に見ることや見せることを示す言葉のまとまりから構成される。「やってみせるから見てごらん」などの〈　技術内容をこのように等で示す言葉　〉のサブカテゴリーからなる。
【　表現を工夫した言葉　】は、技術の演示の説明で表現方法を工夫した言葉のまとまりから構成される。「鉛筆を持つように」などの〈　比喩的表現を用いた言葉　〉と、「方向は腹壁に向かって」・「背中を地面と垂直になるくらいまっすぐにおりる」などの〈　動作をイメージしやすい言葉　〉の 2 つのサブカテゴリーからなる。
【　注目させる言葉　】は、技術の演示の際に注意喚起する言葉のまとまりから構成される。
「ここがポイント」・「ここに注目して」などの〈　意識を集中させる言葉　〉からなるサブカテゴリーからなる。
③考察
　教員が看護技術の演示の際に用いる指導言語は、技術の要素を指す言葉が最も多く、表現を工夫した言葉や、演示の動作を具体的に表現しイメージできる言葉を用いて説明している指導は少ないという特徴がみられた。人は認知機能への刺激を変化させることで脳の機能が高められる（塚原，2017）ことから、演示という視覚的認知に、教員の発する指導言語という言語的認知が加えられると、記憶、連想、注意、集中の連鎖により学生の脳への刺激を変化させつつ、脳の機能が高められ、技術修得へつなげられるとも考えられる。今回の研究結果からは、「ベッドの高さを調整しましょう」などの要素を指す言葉が多く用いられているものの、ベッドの高さをどのように調整するのかの指導言語は用いられていない。「調整」と言う抽象的な言語のみではなく、その動作を想起し、指導言語どおりに動けば教員と同じ動作ができるような言語表現を用いることで、学生の技術習得がより効果的になると考える。また、「それ」や「ここ」「このように」などの指示代名詞を使用しないで、具体的内容を示す指導言語の使用やイメージしやすい比喩的な表現を用いるなど、学生に説明する時の指導言語を工夫する必要があると考える。
(3)指導言語にオノマトペを用いた効果
①対象者の概要
　実験群（演示時の指導言語にオノマトペを用いた群）15 名、対照群（演示時の指導言語にオノマトペを用いない群）15 名に対し事前に実施した「臥床患者への寝衣交換」の技術チェックの得点（実験群：28.0、対照群：30.1）には有意差はみられなかった。分析対象は、教員の演示と３回の技術練習に参加した実験群 15 人、対照群 12 人とした。
②結果
　技術チェック評価者３人の一致度は、事前調査（ICC:0.85）,事後調査（ICC:0.87）であった。事後調査の総得点は、実験群 87.1、対照群　76.5　で両群の寝衣交換技術の修得度に有意差（$p<0.01$）がみられた。25 項目中「寝衣を無理なく丁寧に脱がす」「新しい寝衣を無理なく丁寧に着せる」「寝衣の背縫いを背柱に沿わせて、寝衣のしわをとる」「新しい寝衣を患者の下に丁寧に入れ込む」など　14 項目において、演示時にオノマトペを用いた指導言語（表 2）を使用した実験群の修得度が有意（$p<0.01$,$p<0.05$）に高かった（表 2）。

表2　オノマトペを用いた指導言語(有意差があった項目のみ)

自分から遠い方の患者の襟元に手を入れて、**チョッピリ**広げてから、自分に近い方の襟元を患者の肩より**スルリ**と下げます。そして、患者の肘と前腕を自分の手のひらにそっとのせて、寝間着の袖口を**スーッ**と通し脱がせます。
次は、新しい寝間着を着せる動作です。自分に近い患者の手首や前腕を自分の手のひらにそっとのせて、新しい寝間着の袖口から**スーッ**と入れて、新しい寝間着を着せます。
次は、患者の両膝を立てる動作です。自分の右足を前に出し、肩幅に開き、ベッドに対して対角線上に立ちます。患者の両方の膝の上に自分の親指を当てて、残りの指を膝の裏側に置くように患者の膝を**ソッ**とつかみます。。そして、そのまま、自分の体重を前足にかけ、患者の両足が**ポンと**軽く上がるように、自分の体重を後ろ足にかけます。
次は、患者を横に向ける動作です。患者の両膝に自分の手のひらを置き**サッ**と向こう側に倒します。両膝が倒れると、患者の上半身が上がってきますので、**モサモサ**しないで、上がってくる患者の上半身の肩を支え、ゆっくりと向こう側に倒します。
横向きになった患者の背中を支えて、新しい寝間着を、両手で**サッ**と広げます。
次は古い寝間着を取り除く動作です。古い寝間着には汚れがあるから、その汚れがシーツの上に落ちたりしないよう**さっさっ**と内側に丸めます。
内側に丸めた古い方の寝間着を横になっている患者の下に**ソッ**と入れます。入れる時には、丸めた寝間着を**クシャクシャ**にしないように丁寧に入れます。
新しい寝間着の中心を患者の背骨に**ソッ**と沿わせて、背中で**しわくちゃ**になっている寝間着を**ピーン**と伸ばします。
新しい寝間着を扇子のように折るか丸めて、横になっている患者の下に**ソッ**と入れます。入れる時には、丸めた寝間着を**グジャグジャ**にしないように丁寧に入れます。**ぎゅっぎゅっ**と入れてはいけません。
古い寝間着には汚れがあるから、その汚れがシーツの上に落ちたりしないようさっさっと内側に丸めて、**サッ**と取り除きます。
患者の下に入れてある新しい寝間着を**ススッ**と引き出します。ぎゅっぎゅっと引っ張らないように取り出します。
新しい寝間着の袖口に自分の手を入れて、患者の肘と前腕を自分の手のひらで下から**ふんわり**と支えて、寝間着の袖口を**スッ**と通し着せます。
患者の襟元が**キューキュー**ではないか、**くしゃくしゃ**でないか、また、寝間着の前が**くしゃくしゃ**な状態になっていないか観察して整えます。そして、背中の寝間着が**しわしわ**にならないように、しわをとります。

③考察
　オノマトペは感覚的な印象を表し、複雑な内容や微妙なニュアンスも自由に表現でき、動作表現の補助としての機能がある。「手関節を下から支える」という指導言語よりも「手関節を下からフンワリと支える」という指導言語の方が、支え方の動作をやわらかいイメージとして連想することができ、手関節を掴まない丁寧な動作ができるように修得できたと考えられる。これらのことから、寝

衣交換技術の修得を高めるためにオノマトペを用いた指導言語の教示は有効であることが示唆された。

表3 寝衣交換技術の修得度比較

評価項目	対照群	実験群	有意確率	
援助の目的や方法をわかり易い言葉で説明し同意を得て実施した。	2.47	2.56	0.534	
自分の膝関節がベッドのフレームにつく程度にベッドを挙げた。	4.00	4.00	1.000	
作業域を考えて、床頭台、オーバーテーブル、椅子を移動させ新しい寝衣をとりやすい場所に準備した。	3.58	3.78	0.137	
遠位側の襟元を少し広げ手前側の寝衣の襟元を患者の肩より下げ、上肢を下から支えるようにして、寝衣を引っ張らないで、無理なく丁寧に脱がした。	2.78	3.53	0.000	***
手前側の手を迎え入れ、手関節や上肢を下から支えるようにして手前側にある新しい寝衣を無理なく丁寧に着せた。	2.81	3.82	0.000	***
患者の腕を掴まないで、上になる腕を上にして胸の上で丁寧に組ませた。	3.06	3.09	0.872	
患者の両膝の上に自分の親指を当て、残りの指を膝の裏側に置くように患者の膝をつかみ、重心移動を利用して、患者の両足が軽くあがるようにして、両膝を高く立てた。	2.69	3.53	0.000	***
先に患者の両膝を向こう側に倒し、時間差で上がってくる患者の上半身の肩を支えて、転落防止に配慮しながら患者を側臥位にした。	3.31	3.78	0.001	***
横向きになった患者の背部で新しい寝衣を広げる時は、手際よく広げることができた。	3.25	3.69	0.002	**
古い寝衣の汚れが拡がらないようにすばやく内側に丸めた。	2.89	3.58	0.000	***
内側に丸めた古い寝衣を側臥位になっている患者の下に押し込むのではなく丁寧に入れ込んだ。	3.06	3.73	0.000	***
新しい寝衣の背縫いを背柱に沿わせて、背部の寝衣のしわを伸ばした。	2.89	3.76	0.000	***
新しい寝衣を扇子折か丸めて、側臥位になっている患者の下に押し込むのではなく丁寧に入れ込んだ。	2.97	3.78	0.000	***
患者を看護師側に半側臥位にし、患者の身体の一部に触れながら安定させて、古い寝衣の汚れが拡がらないように丸めながら取り除いた。	2.5	3.49	0.000	***
患者の下に入れ込んだ新しい寝衣を引っ張らず無理なく引き出した。	3.22	3.8	0.000	***
迎え袖で、手関節を下から支えるか握手をして反対側にある新しい寝衣を無理なく丁寧に着せた。	2.72	3.53	0.000	***
襟元は窮屈でなく、前身ごろや袖は整えられ、背部のしわを丁寧にとった。	2.97	3.33	0.047	*
寝衣が右前合わせになっており、ひもは患者が苦しくないように横結びになっていた。	3.42	3.62	0.239	
患者に着心地を確認していた。	3.5	3.13	0.119	
終了後、音をたてずにベッド柵をつけ、静かにベッドを下げ、環境を整えていた。	3.11	3.38	0.183	
ナースコールを手の届くところに置いていた	3.08	3.07	0.953	
実施中、患者の状態を確認する声掛けをわかり易い言葉で行っていた。	3.00	3.00	1.000	
全体をとおし、動作に無駄がなくスムーズにできていた。	2.94	3.27	0.070	
全体をとおし、最大作業域の範囲で作業することができていた。	3.17	3.64	0.000	***
全体をとおし、安全に配慮し実施していた。	3.14	3.22	0.587	
合計	76.5	87.1	0.000	***
p<0.05* ,p<0.01**,p<0.001***				

以上の研究結果から、教員は学習者の演示に対する肯定的な認識を活用し、具体的内容を示す指導言語としてオノマトペの使用やイメージしやすい比喩的な表現を用いるような指導を実施することで演示を効果的にすると考える。そのような指導が、教員の看護技術演示力を高めることになるといえよう。

（4）引用文献

①宮芝智子，舟島なをみ：看護技術演習における学生の行動‐演習目標の達成に向けて重要な行動の明確化‐,日本看護学教育学会誌，21，1-11，2012.
②中野雅子，伊藤良子，徳永基与子：看護学生間の演習における看護師役・患者役体験の学びと課題,京都市立看護短期大学紀要，35,101-107,2010.
③北村勝朗：スポーツ・音楽・芸術領域における「わざ」習得過程の定性的分析による「教育情報」の解釈，教育情報学研究，1,77-87，2003.
④永山貴洋，北村勝朗，斉藤茂：機会体操競技選手の学習方略に対して比喩的な指導言語が与える影響の定性的分析，教育情報学研究，3，67-76，2005.
⑤植田恭史：コーチング研究〔II〕－水平跳躍種目の技術指導における用語と言い回しの分析－, 東海大学体育学部紀要, 32, 13-18, 2002.
⑥中西沙織：能の稽古における指導言語に関する研究「わざ言語」をてがかりとして，北海道大学紀要, 教育科学編, 64(1), 111-119, 2013.
⑦及川千絵，勝田隆，関岡康雄：ソフトボールにおける指導言語に関する研究－高校女子プレーヤーとその指導者を対象としてー，仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集，4，2003.

５.主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①中村美起、大津廣子、中井三智子、三井弘子、林暁子、教員が看護技術の演示で用いている指導言語の特徴、鈴鹿医療科学大学紀要、査読有、Vol.24、2017、125-132.
http://www.suzuka-u.ac.jp/research/bulletin
②三井弘子、大津廣子、中井三智子、中村美起、林暁子、査読有、看護技術のデモンストレーションを見学した学生が認知した言葉のテキストマイニング分析、Vol.24、2017、135-143.
http://www.suzuka-u.ac.jp/research/bulletin
③林暁子、大津廣子、中井三智子、中村美起、三井弘子、教員によるデモンストレーションを取り入れた看護技術演習に対する学生の認識、鈴鹿医療科学大学紀要、査読有、Vol.23、2016、65-72.
http://www.suzuka-u.ac.jp/research/bulletin

〔学会発表〕（計７件）

①大津廣子、中村美起、林暁子、三井弘子、中井三智子、寝衣交換技術の演示時の説明とイメージ明瞭性の検討、第 37 回日本看護科学学会学術集会、2017.

②大津廣子、中村美起、林暁子、三井弘子、中井三智子、寝衣交換技術の演示時の指導言語にオノマトペを用いた効果、日本看護研究学会第43回学術集会、2017.
③三井弘子、大津廣子、中井三智子、中村美起、林暁子、看護技術の演示時に用いるオノマトペと比喩に関する学生の認識、日本看護研究学会東海地方会学術集会、2017.
④中村美起、大津廣子、中井三智子、三井弘子、林暁子、教員が看護技術の演示の説明で使用している言葉の特徴、第 36 回日本看護科学学会学術集会、2016.
⑤中井三智子、大津廣子、中村美起、三井弘子、林暁子、看護技術の動作がイメージでｋる言葉、日本看護研究学会第42回学術集会、2016.
⑥三井弘子、大津廣子、中井三智子、中村美起、林暁子、看護技術のデモンストレーションにおける「印象に残る言葉」「理解できない言葉」、日本看護研究学会第42回学術集会、2016.
⑦林暁子、大津廣子、中井三智子、中村美起、三井弘子、看護技術の学内演習に対する学生の認識、日本看護学教育学会第 26 回学術集会、2016.

〔図書〕（計０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大津　廣子（OTSU, Hiroko）
鈴鹿医療科学大学・看護学部・教授
研究者番号：70269637

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
中井　三智子（NAKAI, Michiko）
鈴鹿医療科学大学・看護学部・准教授
研究者番号：60726503

中村　美起　（NAKAMURA, Miki）
鈴鹿医療科学大学・看護学部・助教
研究者番号：70741255

三井　弘子（MITSUI, Hiroko）
鈴鹿医療科学大学・看護学部・助教
研究者番号：80741272

林　暁子（HAYASHI, Akiko）
鈴鹿医療科学大学・看護学部・助教
研究者番号：90741257

(4)研究協力者
（　　）